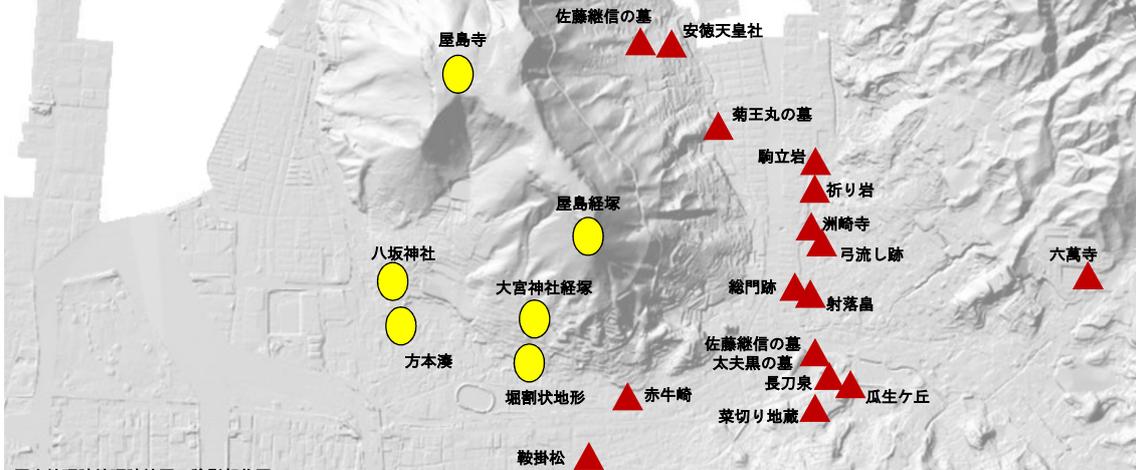


# 屋島を舞台とした源平合戦を読み解く

香川県埋蔵文化財センター 第5回考古学講座  
佐藤 竜馬

源平の旧跡(▲)と中世遺跡(●)



## 3つの課題設定

- 1) 治承・寿永の乱において屋島がどのように位置付けられるか、より端的に言えば「平家はなぜ、屋島に拠ったのか」を考える。
- 2) 『平家物語』・『吾妻鏡』に記される「屋島内裏」の所在地、また「城郭」の構成について、検討する。
- 3) 上記2つの検討を踏まえて「屋島合戦」の推移を、なるべく具体的にたどる。

## <1> 屋島の位置付け 「平家はなぜ、屋島に拠ったのか」

### 【平氏の動きと屋島】

都 落	寿永2年(1183) 5月	平氏軍、加賀国俱利伽羅峠で木曾義仲軍に大敗
	7月 閏10月 11月	平氏一門、京都を脱し九州へ落ち延び、この後、 <b>屋島に拠点を置く</b> <b>平氏軍、備中国水島で木曾義仲軍を破る</b> <b>平氏軍、播磨国室山で源行家軍を破る</b>
反 攻	元暦1年(1184) 1月	木曾義仲、鎌倉軍に敗れ討死。 <b>平氏、屋島から福原(一ノ谷)へ移る</b>
	2月	この頃、 <b>阿波・讃岐国の在庁ら反平氏の兵を挙げ、平教盛の拠る備前国下津井を攻めるが敗退。</b> 在庁ら淡路国福良へ逃れるが平氏軍に攻められ敗れる
膠 着	7月	<b>平氏軍、生田の森・一ノ谷合戦に敗れ、屋島に退去</b>
	9月	伊勢・伊賀平氏の乱(8月鎮圧) <b>平氏軍、備前国児島へ陣を張り、源範頼軍と戦い敗れる(藤戸合戦)</b>
敗 退	元暦2年(1185) 1月	源頼朝、範頼に兵糧米と兵船を送る
	2月	この頃、 <b>平氏軍が伊予の河野氏を攻め、討ち取った首を屋島に送る</b> <b>屋島合戦。平氏軍敗れ、志度道場・塩飽庄を経て安芸国厳島へ退く</b> 檀ノ浦合戦。平氏軍敗れ、一門入水
	3月	



## 平氏が期待した屋島の役割

→瀬戸内各地とつながることを保証する港湾機能

平氏軍の有力な基盤であった水軍を構成する多数の船の停泊空間  
(船溜まり)を確保できるような港湾

## 屋島の中世港湾

・「兵庫北関入船納帳」(文安2/1445年)に見える「方本」

方本船……400石積以上 11艘中5艘

中世の船としては大型の部類

・後述する旧地形からも、最も相応しい場所

## <1>のまとめ 「平氏はなぜ、屋島に拠ったのか」

①畿内・京都を射程に置きつつ、瀬戸内沿岸の多方面  
に展開するのに都合が良い戦略的位置

②多数かつ多様な大きさの船が停泊できる、「方本」と  
いう港湾機能の存在

## <2> 「屋島内裏」と「城郭」 旧地形と遺跡分布から考える

### 2-1. 「屋島内裏」と「城郭」

#### 平氏が屋島に拠ったことは「史実」

談世間事、平氏が讃岐国云々

『玉葉』寿永2年閏10月13日

又聞、平氏一定(確かに)住讃岐国、云々

『玉葉』寿永2年11月4日

※九条兼実(当時、右大臣)の日記

或説云、平氏が讃岐八島

『吉記』

※吉田経房(当時、参議)の日記



しかし、屋島でどのように暮らしていたのかは、後世にまとめられた『吾妻鏡』・『平家物語』の記述に求めるしかない

#### 「内裏/御所」をめぐる『吾妻鏡』・『平家物語』の記述

- ・ここに屋島内裏の向浦に到り 『吾妻鏡』元暦2年2月19日
- ・先帝(安徳天皇)内裏を御出でせしめ、前内府(平宗盛)又一族等を相率いて、海上に浮かぶ 『吾妻鏡』元暦2年2月19日
- ・内裏並びに内府休幕以下舎屋を焼失し、黒煙天に聳ゆ 『吾妻鏡』元暦2年2月19日
- ・船より下りて宮門前に陣す 『吾妻鏡』元暦2年2月19日
- ・播磨国に於いて後之処を顧みるに、屋島の方黒煙天に聳え、内裏以下焼亡 其れ疑ひ無し、云々 『吾妻鏡』元暦2年3月8日
- ・成良が沙汰にて、内裏とて板屋の御所造り給ひけり 『延慶本 平家物語』8(第4)14
- ・先帝を初め進らせて、女院・北政所・大臣殿以下の人々、屋島の御所の惣門の渚より、御船にめす 『延慶本 平家物語』11(第6本)8
- ・昨日、屋島の御所落とされて、内裏焼き払ひて 『延慶本 平家物語』11(第6本)12

## 『吾妻鏡』・『平家物語』から読み取れること

### ・板葺き(板屋)の御所(内裏)があった

京都のような格式のある建物ではなく、「板屋」  
天皇の住まう場所として「御所」「内裏」と呼ばれた

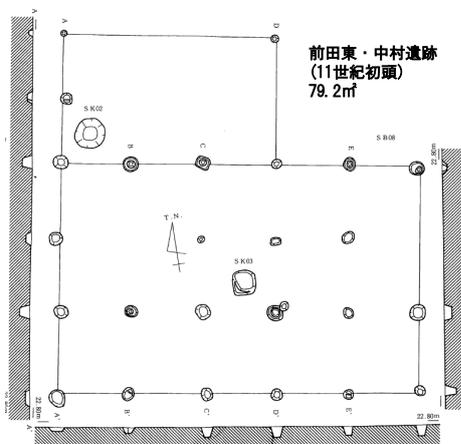
### ・御所の周囲に、平氏一門の住まう建物(舎屋)があった

### ・御所と海岸との間には門(宮門・惣門)があった

「惣門」という語彙からは、御所だけでなく平氏らの舎屋も囲むような施設、  
もしくは地形の存在がうかがえる

## この時期の遺跡の発掘成果から想像すると……

- ・讃岐・阿波地方における上位クラスの建物群
- ・掘立柱構造ではあるが束柱で支えられた床や縁を伴う大型建物
- ・30～40m四方程度の敷地を伴うような姿



## 「城郭」をめぐる『吾妻鏡』・『平家物語』の記述

- ・ 前内府讃岐国屋島を以て**城郭**と為す 『吾妻鏡』元暦2年2月16日
- ・ 此の屋島の浦は、吉き**城廓**にて候ふなり 『延慶本 平家物語』8(第4)14
- ・ 屋島には大臣殿を大將軍として、**城郭**を構へて待ち懸けたり 『延慶本 平家物語』10(第5末)31
- ・ 屋島の**城**へ押し寄せたり 『延慶本 平家物語』11(第6本)8

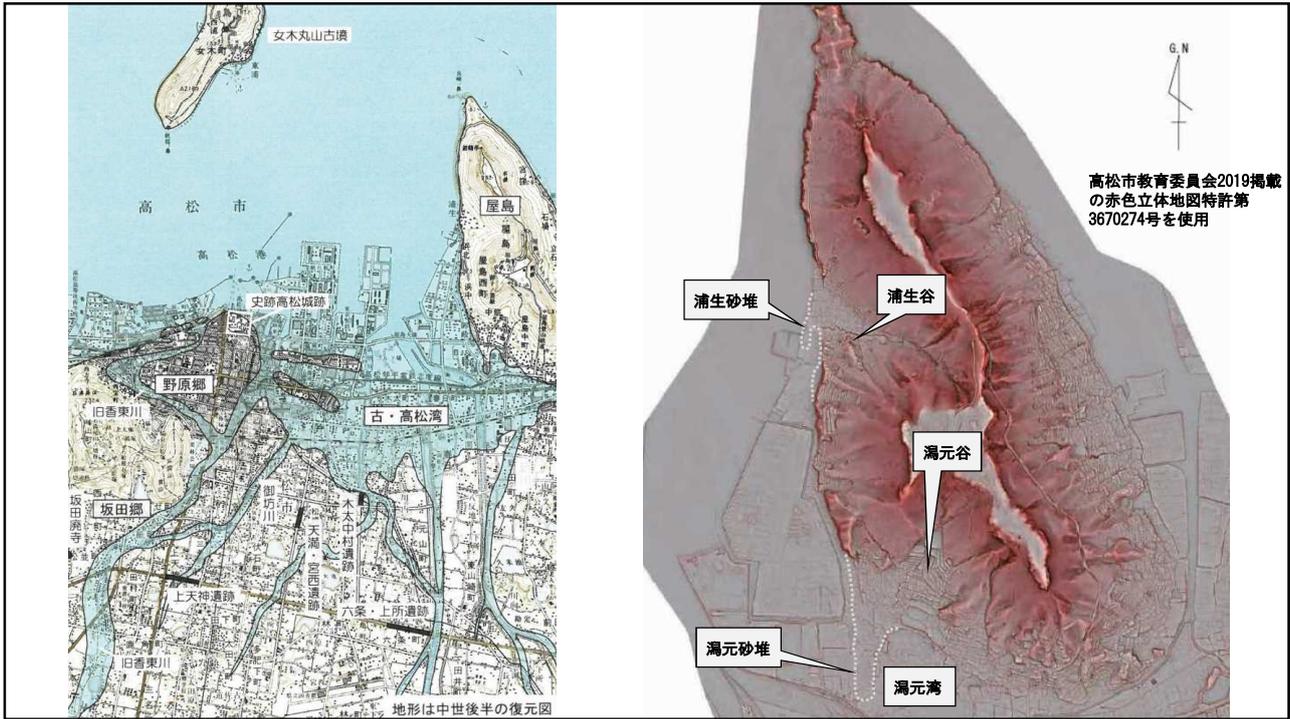
平安時代末期～鎌倉時代初期での「城郭」の用例をめぐる、先学の議論を踏まえる必要



多くの論者が「城郭」を単なる文飾ではなく、何某かの場所性の表現と捉えている  
例えば…… 交通の遮断施設(川合康氏)

### 2-2. 島としての旧地形





高松市教育委員会2019掲載の赤色立体地図特許第3670274号を使用

山腹の地形と海岸線とは相関関係にある

2つの対比的な相貌

- ① 比較的広く平滑な斜面と砂堆の発達した西部・南西部
- ② 細かな起伏を伴う斜面と直線的な海岸線をもつ東部

↓

「内裏」や「城郭」を考える際の重要な手がかり

## 2-3. 遺跡の分布とその背景

### 古墳分布の変化

- ・前半期(前期・中期)……尾根上にあり、広域(海域)への眺望に優れる
- ・後半期(後期)……尾根から下った斜面にあり、潟元谷・潟元砂堆・潟元湾を意識したような立地へと変化

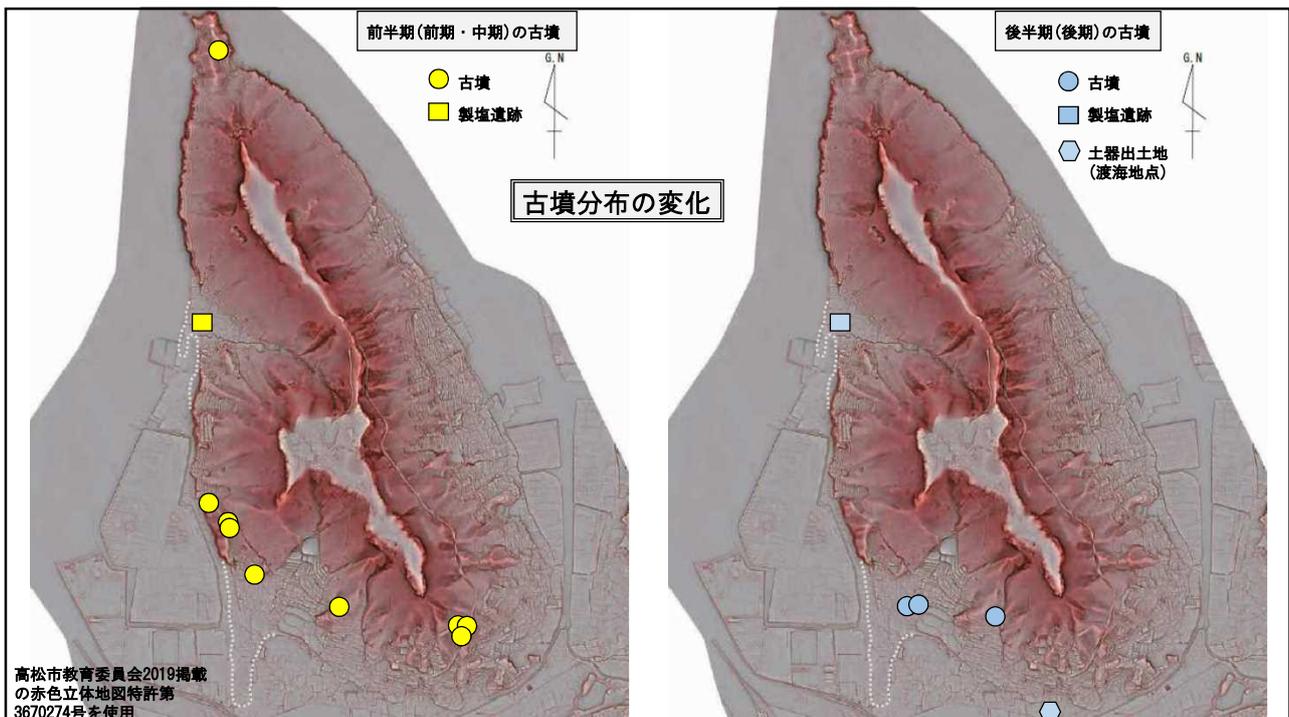
### 従来の「屋島合戦」比定地(屋島東麓地域)

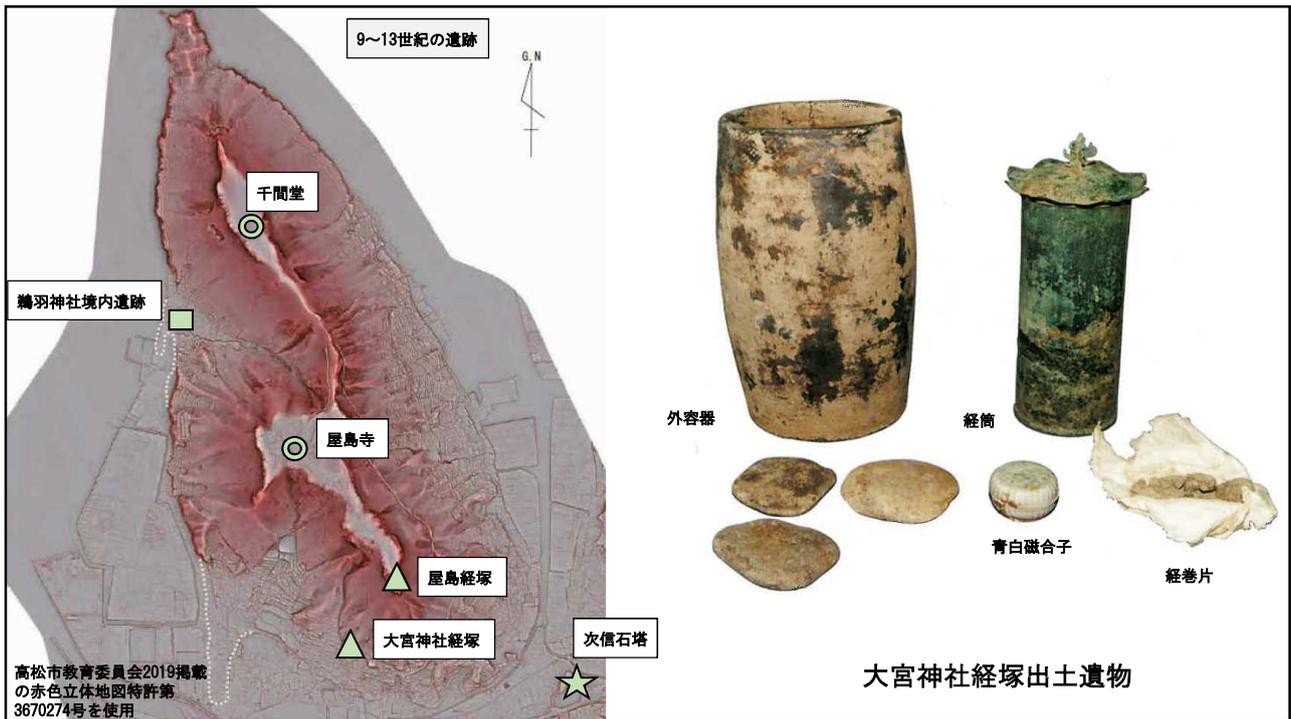
古代～中世前半(鎌倉時代)の遺跡の存在は明確でない

安徳天皇神社等で中世後半(室町・戦国時代)～近世初頭の石造物が確認される程度



「屋島合戦」比定地での古代～中世遺跡の低調さと、潟元周辺での特徴的な遺跡群の展開、という対比的なあり方

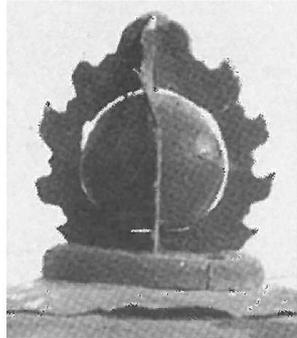






一宮経塚（阿波）

国立博物館所蔵品統合検索システム  
ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)  
E-14539\_E0076640 をトリミング



千手院経塚（讃岐）



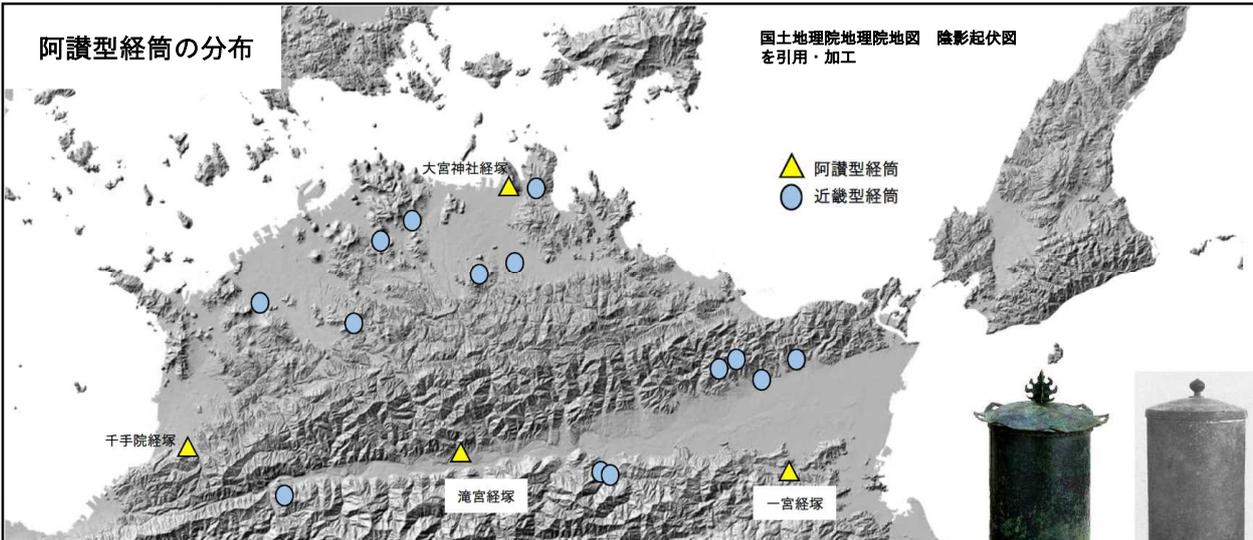
滝宮経塚（阿波）



大宮神社経塚（讃岐）

### 阿讃型経筒の変遷（火焰宝珠）

### 阿讃型経筒の分布



「屋島合戦」の前後の時期に、瀧元湾を望む尾根上に阿波とのつながりの強い経筒を使って埋経した主体のいたことは、**田口成良と屋島との関係性の前提をなすか、関連する事象**として、特に留意しておく必要がある



阿讃型



近畿型